

## 8月30日（金）に行われた鶴岡首席交渉官による記者会見の冒頭発言

今回のラウンドは、閣僚会議からはじまり、非常に熱心に交渉を行った。第19回のTPPのラウンドは、日本が本格的かつ各国と対等に参加した初めてのラウンドだが、その印象を最初に申し上げる。

我が国は、前回のコタキナバルの会合の最後の段階で参加を認められ、コタキナバルにおいて、それまでに得ていた間接情報を直接情報に転換した。その後、ブルネイ交渉の準備を本格的に開始し、閣僚会議から始まった今回の交渉に本格的に参加した。甘利大臣の閣僚会議における立場表明での発言や意見表明は、これまで18回の会合に参加したほかの大臣と比べて何ら遜色がなかった。また、各国からも日本が新入生であるかのような取扱いは全く受けなかった。私自身も、首席交渉官会合において、新入生扱いやほかの参加国との差別や違った待遇は経験しなかったし、幸い、日本側の準備が十分整っていたこともあり、本格的に議論に参加できたと思っている。

入った途端に若干生意気と言われるかもしれないが、困難な課題についても各国と相談しながら提案を提出し、日本として果たせる役割、例えば議論の仲介など積極的に果たしていこうという意欲で閣僚会議、首席交渉官会合、各作業部会において日本は交渉に臨んだ。各国からは非常に好意的に日本の参加を受け止められており、日本が初めて参加した作業部会も少なくなかったものの、そういった作業部会が首席交渉官達への報告を行う際には、冒頭に日本の参加を歓迎すると言っていた。それは外交辞令的なものにとどまっていないのではないかと自負できるくらい、各交渉官が勉強し、できるだけ内容のある参加を心掛けたものと理解している。

今回は、閣僚会議において、バリのAPEC首脳会議の際に恐らく開催されることとなるTPP首脳会合を目標として作業を行うことが指示された。具体的には、バリの首脳会合において大筋合意を実現するために必要な作業を今後加速化させ、十分成果をあげるようにという指示があったわけだが、多岐にわたるTPPの交渉の各作業部会で同時並行的に議論がされ、いくつかの分野において進展があり、困難な問題について議論が深まり、さらなる進展のための方向性を見出すための議論がなされた。進展がまったくなかった分野はないと理解しているが、他方で解決して仕上がった分野もない。具体的な進展に向けた、様々な進展がみられたことを公平な評価として申し上げることができる。

特に困難といわれている、知的財産、競争や環境、労働のような、いわゆる通商協定では通常扱われない新分野について、首席交渉官の間でも困難な課題であるとの認識が共有されている。それ以外の分野でも、大きな方向性がすで

に出ている、技術的な議論が淡々と交渉され協議が相当進展したものもある。議長国のブルネイから発表されたプレスリリースでもそれらの分野が列挙されているが、進展しているか、していないかは、相当主観的な評価である。全部まとめれば、だれもが進展に疑問なしとなるが、現段階では、どの分野が進展したのかは主観的な評価とならざるを得ないため、分野羅列型なプレスリリースとなった。

日本の立場から申し上げれば、交渉にそれなりの進展があったことを評価できる。具体的には、今回の交渉の位置づけは、バリのTPP首脳会議に向けた準備の皮切りである。皮切りの作業は、バリに向けて閣僚からの指示を受けたという活力を、これまで進展ができなかった分野を加速化させて進めるために、まずは問題点、課題の明確化とその認識の共有をすることが基本になる。克服されなければいけない課題と問題が明確化され、その認識が共有されことは、今後の交渉を進める上で必要な素材が相当程度整えられた、または整えられつつあると申し上げることができる。その上で、その素材をもとにどのような課題解決のための具体的な提案や条文にまとめるかということが、今後の課題だが、その作業を行う材料が今回のラウンドで相当進展した。様々な作業部会が中間会合をバリまでの間に開催することを予定しているが、バリで開催されるであろうTPP首脳会合において成果を出すことが可能となるよう、9月の1か月間を最大限活用してそれぞれの課題について前進させるための相当程度の作業が行われる。交渉官たちは、朝早くから会合を重ね、また、夜遅くまで会議を開催しており、これは交渉官が交渉を進展させよう、課題を明確化しようという意欲を表していると考えている。日本の代表として、今回の交渉の結果は、バリにおける成果を実現するためにも有意義な準備会議だったといえる。

(以上)